

世紀から一八世紀中葉までが井戸の使用期間を示すと考えられる。

8 木簡の釈文・内容

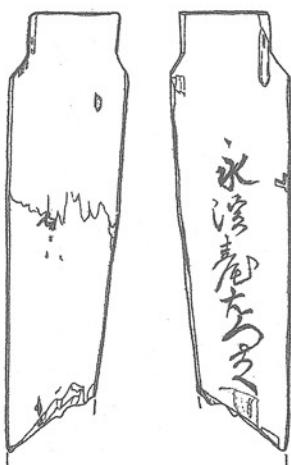
(1) 「く永浜台右衛門殿

・「く□□」
(222)×59×7 039

上部に切り込みをもち、下に向かって幅を狭めている。下端は欠損する。一面に宛先とみられる墨書があり、反対面にも墨書があるが判読できない。ここでは判読できる宛先の書かれた面を表と考えておく。屋敷地に納入された物資に付属したものと思われる。ちなみに、「吉田藩土屋敷図」中には永浜姓を見いだせない。

吉田城址では、このほかにも城内の三の丸に所在した井戸から近世の木簡が一点出土している。こちらは現在報告書作成に向けた整理作業の途中のため、時期を改めて報告することとした。

(岩原 剛(豊橋市美術博物館))



静岡・東前遺跡 ひがしまえ



(浜松)

1 所在地	静岡県浜松市西区志都呂町
2 調査期間	二〇〇六年(平18)七月～二〇〇七年三月
3 発掘機関	(財)浜松市文化振興財団・浜松市文化財担当課
4 調査担当者	川江秀孝・仲川美津保・鈴木敏則
5 遺跡の種類	集落跡・湿地
6 遺跡の年代	縄文時代前期～近世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	東前遺跡は、浜松市南西部の埋没砂丘を含む海岸低地に立地する。東西に長い埋没砂丘の北側には台地がせまつて海蝕崖をなしており、世の木簡が一点出土している。こちらは現在報告書作成に向けた整理作業の途中のため、時期を改めて報告することとした。

丘と呼ばれる最も古く形成された砂丘上に位置する。砂丘の南は、浜名湖に連なる大規模な列間湿地であるが、当地区のすぐ南には、状の微高地が存在する。遺跡は微高地やその周辺の湿

地にまで広がる。

発掘調査は微高地を中心に実施した。遺構は耕作などによる攪乱のためほとんど確認されなかつたが、遺物は縄文時代前期から近世までのものが出土した。特に弥生時代中期から奈良時代にかけての遺物が多く、土器や木器などの遺物は、湿地への落ち際で多く出土した。

木簡は、砂丘と微高地との間の流路底面から、八世紀後半の木製人形や土器とともに、幅一mほどの帶状をなして出土した。木簡は一点のみであるが、「孫足」と書かれた墨書き土器が共伴し、また、微高地南側の湿地でも「長女」と書かれた墨書き土器が出土した。二点とも、須恵器の無台杯身である。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「□□若日下マ足石十九□」

178×26×2 051

左辺上部が欠損し、上端部は少し腐蝕しているが、ほぼ原形をとどめる。「若日下マ足石」は人名で、伊場遺跡群に類例の多い「郷名(「郷」字は省略)十人名(+数量)」の付札とみられる。若日下部は伊場遺跡第五六号木簡にもみえる。「マ」の部分は墨が完全に流出し、浮き字として確認された。「十九」は何らかの数量で、以下の□は単位であろう。簡略化されていて判読できないが、「束」の可能性が考えられる。



(鈴木敏則)

東前遺跡がある志都呂町は、古代敷智郡衙と考えられる伊場遺跡群から五km西方にあり、「和名抄」にみえる小文郷と推定される地域である。最初の一文字の郷名部分は「中寸」の可能性も考えられるが、この地名は伊場遺跡の北側にある中村遺跡周辺と考えられており、やや距離がある。その当否はともかくとしても、郡衙から離れた遺跡で伊場遺跡群出土木簡と同種の木簡が出土したことは、この地に郡衙機能を代行する有力な村が存在したか、あるいは郡衙の出先機関のような施設が置かれていた可能性を示唆する。伊場遺跡群によって明らかになってきた古代の敷智郡の実態を考える上で、新たな重要な史料の出現と評価できるよう。